

学生の学びと 成長の支援

松井 かわり

● 全学協議会が改革の原動力

「立命館を見ていると、大学改革のデパートという感じがする。ここには考えつく限りの改革の試みがある。——中略——マンモス大学でなおかつ、こうした積極的に素早い改革を可能にしているのは、全学協議会の存在であるようだ。理事会と教授会は事実上、一体化しており、これに学生も職員も加わる。全員参加型の合議のなかで、危機感が共有され、トップダウンでありながらボトムアップでもある、意思決定がなされる。」

リクルート社が発行する「カレッジマネージメント」のなかで、大南正瑛学長にインタビューした天野郁夫氏は、この

ような感想を述べている。

天野氏の言葉はさておき、立命館大学には、「全学協議会」という学園の構成員が教学や大学の将来構想について協議する機関がある。全学協議会は、理事会、学友会、院生、教職員組合、生協（オプザーバー）で構成されているが、今年度の全学協議会で、学友会は「学生の学び成長したいという要求の高まりに確信を持って、一つ一つの授業に学びと成長を実感できる教学改革を行なうための論議を行ないたい。」と問題提起し、副学長は「昨年度の全学協議会の意義は、全構成員の努力により困難はあっても私学の柔軟で自由な力を発揮し、全学一致して取り組めば状況は切りひらいていける。だからこそ、教学改革の手をゆるめることなく進めていく必要がある。」と述べた。

学生の学びたい、成長したいという要求を軸に教学改革を全構成員の合意形成を進めながら行なう、この力が立命館の大学づくりの原動力である。

● 学生の活動を支援するしくみづくり

私は、学生部で学友会の担当をしている。全学に対して、学生の要求を正確に伝え、改革の進め方、方向性を整理し、学生に対してもそれをかえしながら進める。

昨年は、全学協議会を通じて、学生の「学びの実感」ということを論議してきた。このなかで、学友会は、学生の学びの実感に目をむけること、個々の授業がどのように変わり、そのなかで学生がどのように成長するかを明らかにすることが重要であると主張した。こうした主張の背景には、社会人を含む多様な学生の学び、目標に向かって努力する学生の姿、学生相互の励ましあい、成長したいという要求がある。

学生の自主的な学びと成長という視点から、学生の動きや特徴をあげてみる。

①立命館大学には「オリター」という

新入生を上回生がサポートするシステムがある。これは、自治会が組織・運営して二十年以上にわたって行なわれている

が、一回生の小集団クラスのクラスづくりや学習援助に参加する学生が年々増加し、現在では六百名を超える学生が、オリターとして新入生援助にあたっている。あわせて、自治会スタッフとして相当ボリュームのある機関誌を発行したり、企画づくりを行ったり、「語学フォーラム」や「基礎演習フォーラム」（一回生小集団クラスでの授業運営等についての検討）など多様な形態と方法で教学改革への日常的なアプローチを行なったりと、自治活動は多様に展開されている。企画への参画、調査・分析、提案づくり、集団での取り組みなど、「自治活動はおもしろい」のである。

②そして、震災ボランティア、沖縄問題、京都における大学のまちづくりの環境としてのおまつりイベントづくり、介護ボランティア、と学生はキャンパス内

外で様々な試みをし、社会へのアプローチをしている。

③世界と日本の学生たちが平和な世界の創造に向けて共に語り、交流した「世界大学生平和サミット」のボランティアスタッフや戦後五十年を考える韓国、中国への平和セミナーなど大学が主催した取り組みに多くの学生が参加し、その後も新たにサークルを結成して、自主的に活動を続けている。

このような学生の積極的な面——社会との関わりを積極的に要求している点、体験や参加を通じた集団のなかでの成長——をしっかりと受け止め、学生の成長を促進する教学づくり、学園づくりをすることができかが重要である。学生が主体的に参加でき、教職員との豊かなコミュニケーションのもとに進められることが決定的に重要である。こうした考え方は、「教え」「教えられる」という関係からの脱却という点で、新たな教育観づくりへの第一歩であるともいえる。

こうした学生の自主的な取り組みへの大学としてのサポートも大きく変化している。プレスメントリーダー制度（就職部が募集し、ゼミ・サークルから就職活動を行なう学生のまとめ役を選出）、授業改革や産学共同など新たな分野で学生がプロジェクトスタッフとして教職員と共同で取り組んでいる。

また、従来、学生の自主性にのみ依拠してきた自治活動に対して、自治活動援助を大学における教育の課題として位置づけ、オリターに対する援助制度を充足させた。教室という枠組みを超えてキャンパスのあらゆる場所で、学生の参加を追求し、学生自らが社会に情報発信する力、時代を動かしていく力を育てることに積極的に挑戦してきた。

● 変わる学生部業務

こうしたなかで、学生部業務は、課外活動とりわけクラブ活動援助、カウンセリングや下宿・アルバイト・奨学金など

従来型では、新たな教学コンセプトや正課外教育の領域の広がり、事件事故にみられる今日の学生の行動様式の変化に対応する業務には対応できない、と考えている。

こうした考え方に至る経過や理論的検討については、立教大学の藤原芳行氏が研究し、日本に紹介された、アメリカにおける学生援助の考え方（学生の発達と成長を促進するという視点からの学生部業務の在り方）に学ぶところが大きい。アメリカでは、こうした観点から学生部門のスペシャリストが養成され、学生教育のプログラムも豊富である。こうした点については、以前に「学生発達理論と課外教育の課題」（立命館大学教育学研究「第六号」）でまとめているので参考にしていただきたい。

学生部業務を、大学づくりへの学生参加をさらに進め、学生の多様な活動を包み込んだ自治活動支援、社会との接点で時代を動かす力をもったたくましい学生

たちを育てるセクションとしてリニューアルしていく必要を強く感じている。そのため、正課外での教育プログラムの開発、学園の様々な機関との協力・連携も不可欠であるし、自立し自己実現する学生を育てる視点とともに、学園や社会を動かす共通の価値、連帯感をどのようにつくりあげていくかという点が重要であると考えている。

今、立命館では、学生の学びと成長を軸にした新しい教学づくり・サポートシステムづくりにむけて動きだしている。その源は、全構成員の参加による新たな価値創造と発信であり、これこそが立命館アイデンティティなのである。

まつい・かおり

立命館大学学生課